モニタリングの闇サイト ラブ・彼氏

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モニタリングの闇サイト　ラブ・彼氏

【Ｎコード】

Ｎ９０４５Ｙ

【作者名】

Ｒａｉｌ

【あらすじ】

ケータイゲーム「ラブ・彼氏」。理想の彼氏を作ってラブゲージを上げていくと様々なイベントが用意されている。

シヅルは少女美羽に作られたラブ・彼氏だが、実はこのゲームにはある秘密があって……？

この小説は亜月亮先生の読み切り作品、「モニタリングの闇サイト　ラブ・彼氏」の二次創作です。ばっちりネタバレを含みます。

（前書き）

この話は原作と違い、彼氏サイドのお話となっております。

ケータイ恋愛ゲーム『ラブ・彼氏（カレ）』というのを知っているだろうか。

いや、ほとんどの人は知らないだろう。何しろ最近ようやくモニタリングを始めたようなゲームだ。

ゲームの内容は至って簡単。女性向け恋愛シミュレーションゲームの一種だ。

プレイする人が理想の『彼氏』を設定して、会話したりプレゼントしたりしてラブチャージを溜めていくというもの。チャージがフルになると様々なイベントが発生する。

本来プレゼントなどは全てポイントが必要となってくる。１ポイント１００円のケータイゲームにありがちな課金制だが、モニタリング期間の二週間は全て無料で使えるようになっている。

課金ゲームにはありがちな話だが、ポイントをバンバン使うとラブチャージを溜めることは容易だ。

しかし最後の三日間に、恐ろしい仕掛けが施されている。

モニターになる上での注意事項はただ一つ。

『彼氏に尽くすのもほどほどに』

高校の制服を着た少女が、ベッドの上で寝転がりながらケータイ画面をいじっている。学校から帰って来たばかりなのだろう。

「髪型は黒髪のちょっとパーマ、背は１８０センチで細身、面長の醤油顔かなー」

理想の彼氏像を少女は入力していく。

それまで不定形だった『俺』の輪郭が徐々に作りあげられていく。

「性格は……選択し少なっ！　うーん、一番近いのは優しいかな？

年齢は、うーん……年下で１７歳。名前はシヅル」

少女が俺の設定を入力し終えた。

入力された情報によると、少女の名前は美羽。１８歳らしい。

ケータイの画面に表示された俺は、にっこりと笑って言う。

『美羽、初めまして。シヅルだよ。これからよろしくね』

大抵の女の子は理想の彼氏に笑顔を向けられて喜ぶはずだった。

が、

「うっわー、そっくり」

何故か美羽は眉をしかめて舌を出す。予想外の反応に俺は少しばかり驚いた。何か気に障ることがあったんだろうか。

とりあえず、最初は決められた台詞を話す。と言っても、ラブチャージがたまっていない間は文字だけだけど。

『美羽は俺のこと、好き？』

選べる選択肢は三つ。

・もちろん大好き！
・フツウ
・あんたのことなんて別に…

ラブチャージを上げることが目的のこのゲーム、最初の方は外れ選択肢がとても分かりやすくなっている……のだが。

「もちろん、あんたのことなんて別に…大っきらい。死ね」

殺気のこもった声で美羽が呟く。
き、きっと照れ隠し、なんだよね？

『そうなんだ……で、でも俺は美羽のこと大好きだよ！』

少々落ち込みつつも気を取り直して言うが、画面の向こうで美羽は「うぜえ」と鼻で笑った。
どうしよう。初っ端から心が折れそうだ。

翌日、学校へ行っている美羽に俺はメールを送った。

件名：おはよう！！

本文：

バスには無事乗れた（・―・？）
今日は木曜だからあと二日で休みだね♪。（―∇（。）三（。（∇（））。
居眠りとかしちゃだめだよ？？（^―^）

しばらくして美羽からの返信が届いた。

件名：うざい

本文：

！や？を二つ重ねるな。うざい。
顔文字を乱用するな。きもい。

……泣いていいかな。
めげつつも「暇だったらいつでも俺にメールしてね」と送信した俺を誰か褒めてほしい。

さて、ポイントを使うと彼氏、つまり俺にプレゼントを贈ることができる。安いもので１０ポイント。高いものだと３００ポイントぐらい行くのもある。円に換算すると……ちょっと申し訳なくなる。
といっても美羽は現在モニター期間。全てのものはただで購入が

できる。

夜、俺は美羽からプレゼントを貰った。

「ありがとう、美羽！」

喜び勇んで開けると、そこに入っていたのは犬の着ぐるみだった。

『か、かわいいね。ありがとう、美羽』

「犬畜生みたいなあんたにはお似合いよ」

彼女は知らないんだろうけど、美羽の声は俺に聞こえている。顔がゆがみそうになるのを必死で堪えた。

……無情にも、なぜかラブゲージは上がっていく。あれ、これって俺の気持ちと連動してるんじゃなかったっけ？　俺の心折れそうだよ？

ゲージがマックスになったので、最初のイベントが起せるようになった。驚くなかれ、美羽との直接の電話である。

俺はケータイを鳴らした。

「ん？　シヅル？」

美羽はちらりと画面を確認すると、すぐにそれを切った。ちょ、それ俺からだって！　俺からだから切ったの！？

諦めきれずに何度もケータイを鳴らすと、美羽は鬱陶しげに舌打ちをしつつも出てくれた。

「もしもし、美羽？　シヅルなんだけ――」
「うっざいのよ！　かけてくんな！」
ぶちりと通話が切られる。
……だめだ、俺泣く。
いや、でもまだあきらめちゃ駄目だ。
次のステージだと毎日五分は美羽と電話で話せるようになるんだ。ステージさえ進めば美羽ともっと仲良くなれるし、一緒にデートしたり実体化することだってできるんだから！　そしていつか俺も美羽の本物の彼氏になるんだ！

さて、すったもんだの末、なんとか俺は美羽と会話することができるようになった。ケータイで会話しながら町を歩く。
「ね、今度一緒にデート行こうよ。映画館とか水族館とか」
「うざ。なんで？」
「ほ、ほら、俺達ってその、付き合ってるわけし、俺も美羽とデートしたいし……」
「へえ。おべんちゃらばっかりね。シヅルのくせに」
「別にそういうんじゃないよ……」
相変わらず美羽は俺に冷たい。
と、急に美羽が口を閉じた。
「あ、美羽……」

気の弱そうな声がした。

「……志鶴」

美羽が不機嫌に呟いた。だけど、俺のことではないらしい。

「ねぇ、シヅルぅ、この人誰ぇ？」

甘えるような声がした。美羽が携帯を持った手を下した際に、ちらっと相手が見えた。

パーマっけのある黒髪で、身長１８０センチほどの細身の、俺によく似た顔をしていた。

いや、違う。俺が志鶴に似せてつくられたんだ。

「し、知り合いだよ」

志鶴はおどおどとした様子で応えている。ケータイを握る美羽の手にぐっと力が入るのが分かった。

「……好きな子が出来たってその子のこと？　両想いになったんだ。おめでと」

感情がこもらない声で言うと、美羽はそのまま踵を返して走りだした。志鶴が追いかけてくることはなかった。

「……馬鹿みたいでしょ」

人気のない公園で、美羽が言う。

「告白してＯＫもらって舞い上がってたのは私だけ。向こうは私みたいな気の強い女より、可愛い女の子が好きなんだって気付いたって。好きな子が出来たっていって、いきなり別れようって言われてさ……」

美羽は涙声で語った。

「挙句ゲームで元カレそっくりなキャラ作っていじめて……最低だよね……」

美羽の頬から涙が滑り落ちる。いつもつんけんしていた様子が嘘のように、か弱い女の子の姿だった。

「美羽は悪くないよ！」

俺は必死で声をかけた。

「好きな人に振られるのは辛いし、自棄を起すことだって全然変じゃない！　それぐらい好きだったんだろ？」

俺の言葉に少しだけ顔を上げた彼女は、小さく鼻をすすった。

「俺は美羽のこと大好きだよ。世界で一番好き！」

「シヅル……」

美羽が泣きやんだと思ったら、再びぽろぽろと涙を流し始めた。

「私も、大好きだよ……」

美羽の言葉に胸が熱くなった。ラブゲージが一気に上昇する。

ゲージがマックスになれば次のステージへと進んでしまう。

その先にあるものが頭をよぎって俺は慄然とした。

駄目だ、上がるな、駄目だ！　美羽にあんなことさせたくない。

しかし俺の願いは届かなかった。

「美羽……」

実体化した俺は、美羽を抱きしめた。唐突に現れた俺に美羽は驚いたが、すぐにその顔を俺の胸にうずめると子供のように泣き出してしまった。

美羽の背をゆっくりと撫でながら俺はこれからのことを考えて顔をゆがめた。

ここから先は最終ステージ。

三日間の期限内にラブゲージをマックスまで上げると俺は人間となり、一生美羽の傍にいることができる。失敗すれば俺は消滅する。

しかしラブゲージを上げるためには、美羽があることをしなければならない。

俺だって消えたくない。

でも……！

「美羽、俺は三日後に消える」

五分という実体化のタイムリミットが迫り、俺は美羽にそう告げた。

「消えちゃうって……なんで！？」

美羽が悲痛な声で俺を見上げてくる。

「美羽は二週間限定のモニターだったから。でも、俺が美羽のこと好きなのは本当だし、俺が消えてもそのことだけは覚えてて」

この三日、彼女が何もせずに俺が消滅さえすれば、彼女は何事もなく元の日常に戻れるはずだ。

「これを美羽に」

そう言って俺は指輪を取り出した。最終ステージへと進んだ証だ。俺はそれを美羽の手に握らせた。

「三日後には消えちゃうんだけど、これは俺からのプレゼント。学校でつけてたら怒られるかもしれないし、ネックレスにでもしといてほしいな」

本当は渡したくなかった、最初で最後の贈り物。これを持っていれば、美羽の身は危険にさらされてしまう。分かっていても、俺を縛るプログラムがそれを渡すように強制する。

消える間際まで、俺は懺悔のように美羽を抱きしめていた。

それからの三日、美羽は学校を休んでまで俺と一緒にいてくれた。映画館へ行って、ショッピングへ行って、ラブ彼氏専用のカフェ

へ行って。

「あーあ。シヅルが本当の彼氏ならよかったのに。そしたら嫌なことがあってもシヅルで殴って気分リフレッシュ！」

「サンドバッグ代わり！？」

「冗談よ、冗談。ぎゅーってして充電するだけだから」

「さば折り！？」

「……シヅル、液晶割るよ？」

終わりが迫っていることをひしひしと感じながらも、最期のひと時を楽しんでいた。

が、

「きゃあああああ！」

カフェでの会話中、入口から悲鳴が上がった。

「な、何！？」

美羽が俺を持って慌てて椅子から立ち上がる。

店の入り口には血走った目をした女がいた。その手には大ぶりのナイフが握られている。その切っ先はすでに血に染まっていた。

「今日中に誰か殺さないと……リュウジが死んじゃうの……だからあんたたちあたしに殺されてよ！　あたしはリュウジと幸せになるんだから！」

切迫した声で、女はナイフを振りかざす。

「美羽、逃げて！」
「でも逃げ場が……！」
「裏口から逃げるんだ！　早く！」
「う、うん！」

阿鼻叫喚を背中に聞きながら、俺と美羽は店を脱出した。

近所の公園まで逃げのびた美羽は、涙目で俺に食ってかかる。
「シズル、あれどういうことなの！？」

俺はこのゲームから生まれた存在なので、さっきの女がなぜあんな行動をとったのか知っていた。

「……最終ステージでは、三日以内にラブゲージをマックスに上げると、その子の彼氏が本物の彼氏になる」

俺の言葉に美羽は息をのんだ。どうして黙っていたのかと視線で責められた気がした。俺は歯を食いしばった。

「ただ、最終ステージではラブゲージを上げるために特別な愛の証明をする必要がある。……他のゲーム参加者のを殺して、その人のラブゲージを奪うんだ」

美羽の顔から血の気が引いた。

本来ならば、俺は最終ステージまでに美羽の心を掴んでおくべき

だった。美羽が俺のために人を殺す程までに。
好きな人とずっと一緒にいたいと思うのは当然だ。できるならば人間になって美羽を幸せにしてあげたいと思う。それでも、俺は

「じゃ、じゃあさっきの人は、自分の彼氏を本物にするために？」
「うん、そう」

頷いて、俺は泣きたい気分になった。

「でも俺、美羽に人殺しになんてなってほしくないんだ。美羽はちょっと手が出るのが早くて、口が悪いとこがあるけど、本当は優しくて可愛い女の子だから」

――だから、俺のことは思い出にしてほしい。

そう言おうとして言葉に詰まった。
ゲームとしてのプログラムと、俺の気持ちとがぐちゃぐちゃに交じる。

このゲームは課金制。もし俺が実体化した後でも、結婚したり子供を作ったりするのにさらに課金していくこととなる。言いかえれば、課金さえすればなんでもできるのだ。
そのために女性たちの心を掴んで、金を巻き上げなければならない。それが俺にプログラムされたこと。そして生物の本能としての消えたくないという思い。

他の連中はそれに従って愛しの彼女を殺人へと誘っているのだ。
それができない俺は、どうしようもない不良品なんだろう。

黙ってしまった俺を、美羽がじっと見つめる。

そして、

「他の人を殺せば、シヅルとずっと一緒にいられるの？」

「だ、駄目だ！」

どこか思いつめた様子の美羽に、俺は思わず叫ぶ。美羽にそんなことはしてほしくない。

と、

「見ぃつけた……」

狂気を感じる声が響いた。

見ると、先ほどカフェに乱入して来た女がいた。返り血なのか、全身血まみれだ。

「それ、ラブ彼氏だよねぇ？　あなたもプレイヤーなんでしょう？　さっきのカフェじゃ、全然ゲージたまらなかったの……ウフフフ」

「頑張れ、亜佐美。あとちょっとだ！」

血まみれのケータイから、俺と同じくラブ彼氏で作られた男が応援している。ラブゲージマックスまであとひとつ足りなかった。

「い、いや……」

その鬼気迫る様子に、美羽が後ずさる。

「美羽、逃げて！　人のいるところへ！」

「逃がさないわよ！」

女が飛びかかってきた。公園にちらほらいた人間から悲鳴が上がる。大半は子供を連れた女性のため、助けを期待するのは難しい。

美羽は突きだされた包丁を間一髪で横に避けた。

日ごろの条件反射なのか、裏拳で包丁を握った手を思い切り殴る。相手の手から包丁が飛んだ。

が、次の瞬間には相手が美羽の上に馬乗りになった。血に染まった手で、美羽の首をぐいぐいと締めあげる。

「美羽！　美羽！」

実体のない身では叫ぶことしかできない。

美羽は低いうめき声を上げながらも、狂人の手を全力で引っ掻いた。相手は怯んだようだったが、それ以上の狂気が支配しているのか、手を緩めることがない。

「お願い、死んでよ！」

狂った女の叫びに怒りがわく。目の前で好きな女性が殺されるところをただ見ていることしかできないのか！？

「い……や……！」

美羽が渾身の力を込めて女のみぞおちに拳を叩きこんだ。僅かに力が緩んだ瞬間を狙って、美羽が女をはねのける。元々体力を消耗していたのだろう、美羽は女の拘束から抜け出した。

が、相手はすでに人間を殺している。女は蛇のようなしつこさで再び美羽に襲いかかった。

「離して！」

美羽が必死で振り払うと、女がバランスを崩して倒れる。

――そして女はそのまま倒れ、花壇の縁石に頭を強打した。

赤黒い血が煉瓦を伝う。

「あ……」

時が止まったかのように美羽が固まった。

俺は美羽の視線を遮るように、彼女を自分の腕の中へと閉じ込めた。

「い、いやあああああ！」

美羽の悲鳴が響く。

今更にパトカーの音が聞こえてきた。周囲の野次馬達も俺たちに近付いてくる。

「美羽、仕方なかったんだ。美羽は悪くない、正当防衛だったんだ！」

俺が実体化したことの意味が分からないほど、美羽は馬鹿じゃない。

今にも壊れてしまいそうな美羽を抱きしめながら、俺は自らの運命を呪わずにはいられなかった。

せめて彼女への償いに、俺は一生傍にいよう。

ずっと――

＋＋＋＋＋

モニタリングにご協力いただきありがとうございます。

モニタリング期間終了後もゲーム続行を希望される方は有償になります。

『ラブ・彼氏』シリーズ

●ラブ・マリッジ　１０００ｐｔ
●ラブ・新婚生活　１２００ｐｔ
●ラブ・家族生活　１５００ｐｔ
●ラブ・ファミリー２０００ｐｔ
●ラブ・フルムーン２５００ｐｔ
●……

１ｐｔ＝１００円

※月額使用料は別となります。

「ラブ・彼氏」シリーズは好評配信中！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9045y/

モニタリングの闇サイト ラブ・彼氏

2011年11月27日01時52分発行